

ポーランドと隕石

佐藤家

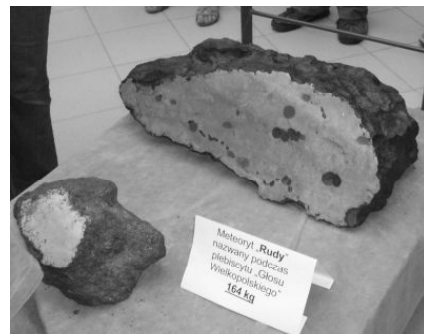


8月末にポーランドのポズナンで「メテオロイド」という隕石や流星に関する学会が開かれ、会長が参加しました。いつものごとくリトルもお供しながら、数日間を過ごしました。

ポーランドはご存じのように、東西冷戦時はソ連の影響下で共産主義政権の「東欧」でした。壁崩壊後は民主化され、地理的な意味からチェコやハンガリーなどと一緒に「中欧」と呼ばれます。2004年にEUに加盟し、2008年にはEU内の国境審査も必要なくなり、お隣のドイツともまったく隔たりがありません。

学会場の大学 ポズナンはポーランド最初の首都で、日本で言ったら奈良ですね。現在は国内第5の都市ですが、千年前のクラシックな建物が残り、旧市街地の石畳の広場には高い塔を囲むようにパステルカラーの可愛い建物が並び、治安も良くて穏やかな街でした。

実は、ポズナンの郊外のモラスコには隕石孔がいくつもあります。ガイドの説明によると、約5000年前に大きめの隕石が落下し、その周辺に大小の隕石孔ができました。砕けた隕石はあちこちに点在し、1914年に最初の鉄隕石が発見され、2012年にはなんと約300kgという巨大隕石も発見されました。隕石孔周辺は雑木林のハイキングコースに整備され、隕石孔には水が溜まっていた。私たちが見学したときは乳緑色の不思議な色をして、直径3～5mくらいの円形の池でした。だけど、道のすぐ下から急な傾斜のすり鉢状になっ



いたから、隕石孔自体のサイズはもっと大きいのかな。

約200kgのモラスコ隕石を半分に切って展示、右は164kgの隕石。



奥には直径 10 m くらいの大きな池があり、こちらはその倍くらいすり鉢状になっていたから、隕石孔としてはそれなりにビッグサイズだと思います（隕石孔について詳しくないリトルの勝手なイメージ）。少し移動した場所に石類（隕石以外の石もごろごろ）展示場と、隣接する大学の研究所がありました。研究室では、いわゆる鉱物サンプルがケースにありがたそうに鎮座していました。しばらく待っていると、台車に

巨大な石が乗って現れました。これが約 300kg（説明板には 261 キロと書いてあったけどうりゃああくまでも“300kg”）の黒々とした鉄のかたまり「鉄隕石」です。その証拠にマグネットは貼り付いていました（笑）。隕石の内部断面には筋状の模様や色が変わった部分がありました（小学生の絵日記レベルの感想）。

学会終了後、アウシュビッツを見学するために特急電車を乗り継いでクラクフに移動しました。こちらはポーランドの旧首都、京都みたいな都市です。アウシュビッツで何を見て感じたかも話したいところですが、『むぎ星』では天文関連のことを。クラクフ中央駅広場にドーム状の建物があり（たぶんエアー）看板にプラネタリウムのような説明がありました。残念ながら時間が合わず見られませんが、クラクフの簡易プラネタリウム!?



ポーランドは日本から直行便の飛行機がないので、ミュンヘン（往路）とフランクフルト（復路）にも寄りました。サッカー・ブンデスリーガ「バイエルンミュンヘン」試合を観戦した話もしたいところですが、『むぎ星』では天文関連のことを。ミュンヘンのドイツ博物館には、天体運行を説明するために 1923 年に制作された「世界第一号の初光学式プラネタリウム」（カール・ツァイス社）があります。いまは、階段のロビーにさりげなく置かれていますが、たしかにこれは「ツァイスのプラネ！」という姿でした。

ドイツ博物館にある第一号プラネタリウム